

佐伯市戦後五十年史 (一)

― 出納市政と産業 ―

都市基盤の整備

矢野 彌生

(会員 佐伯市中山区)

〈前号〉

九 出納市政と教育

- (一) 出納市政の発足と経過
- (二) 学校施設の整備
- (三) 市営球場の建設と大分国体
- (四) 市庁舎の建築
- (五) 市の財政

一〇 出納市政と産業・都市基盤の整備

(一) 躍進する諸工業

臼杵鉄工 (臼杵鉄工佐伯造船所の操業で活況)
 佐伯造船所 興人が操業を開始してから三年後、昭和三十

十一年(一九五六)、野岡山を背にして

臼杵鉄工佐伯造船所が操業を始めた。戦前からの有力な地場工業の一つであった造船業としては本田造船を初め、二、三の中小工場が坂野浦地区にある。

これらは木

造船であったが、臼杵鉄工佐伯造船所は、文字通り鋼船の建造で、わが国造船界の飛躍的な成長の波に乗って、次第にその施設・設備および敷地を拡大してきた(『佐伯市史』)。

第22表 産業別工場数 (昭和35年)

産業分類	工場数	産業分類	工場数
総数	187	窯業・土石製品製造業	12
食料品製造業	80	金属製品製造業	2
家具建具装飾品製造業	17	機械製造業	2
パルプ・紙・紙製品製造業	5	輸送用機械器具製造業	16
出版印刷関係	8	木材製品製造業	31
化学工業	5	その他の製造業	9

(佐伯市統計による)

いま、佐伯造船所の誘致により、佐伯市の造船業界は活況を呈し、造船業は製材合板業とともに、市の中核的工業となった。臼杵鉄工所佐伯工場は、旧海軍航空隊跡に造船所と鋳物工場をもっている。従業員は九四〇人で、造船所は設備・能力ともに東九州第一の鋼船船台三六〇〇トンプレス、各種機重機等近代設備をもち、五〇〇〇トン級船舶の船体建造、エンジン製作、艤装の一貫作業を行っている。

昭和三十四年中に一万四〇〇〇ト以上を建造して、東南アジア諸国や沖繩に輸出している。

日本セメント (昭和三十四年度には従業員三六一名) 佐伯工場 佐伯市の北部海岸で大入島を指呼の間に



臼杵鉄工佐伯造船所
(『市勢要覧』1958年版による)

望む湾の奥深い所に、日本セメント株式会社佐伯工場がある。

大正十四年(一九二五)旧日本セメントが建設したもの(操業開始は昭和元年)で、市内の狩生かりゆうや津久見の石灰岩を原料として、海陸の交通に便利な位置につくられた。戦時中に浅野セメントに属していたが、戦後(昭和二十三年)再び日本セメントと改称し、生産の増強をはかり、輸送力の増大に伴って一三〇トン岩壁を設け、現在三基の回転窯で操業している。

昭和三十四年度には従業員三六一名で、約一七万トンのセメントを生産しており、内需に應ずるはもちろん、沖繩・ベトナム・セイロン等へ輸出し



日本セメント工場の遠望
(『市勢要覧』1958年版による)

ている。

以上のほか、特殊な化学工業として日本酸素株式会社佐伯工場が昭和三十四年設立された。これは日豊沿線の供給源をねらって立地したものである。⁽⁶⁵⁾

佐伯湾（輸出はセメント・合板、輸入はラウの貿易ン材）佐伯湾はセメントを輸出、ラワン材を輸入するので、航空隊跡の海岸に門司税関佐伯支署が置かれている。昭和三十四年から三年間の貿易の状況を見ると、次のとおりである。

昭和三十五年における輸出入金額は約五億三千万円で、セメントの一億九千万円が最も大きい。仕向地は琉球の二万一千トをはじめ、セイロン・南ベトナム・フィリピンで、三十四年にはカンボジアや西アジアにも輸出している。

また、合板はアメリカ向けが大部分で、琉球・イギリス・ケニアにも出ている。

輸入はフィリピンからラワン丸太で、その金額は約四億円である。昭和三十六年に入ってから、ソ連から北洋材が輸入され、カナダに合

板が輸出されている。

佐伯港は水深が浅いので、これを浚渫するとともに物揚場および物揚岸壁を新設するため、総工費五億五千万円の整備計画を立てている。この計画では、葛港は各方

第23表 貿易船出入港実績

年別 昭和	国籍別	入 港		出 港	
		隻数	総 屯 数	隻数	総 屯 数
33	日 本 中 国 ア メ リ カ ノ ル ウ エ ー フ ィ リ ピ ン 琉 球	71	183,985	78	119,210
34		94	150,720	110	156,790
35		77	141,385	83	145,211
35 年 の 内 訳		40	107,918	46	111,744
		1	1,044	1	1,044
		1	4,598	1	4,598
		2	6,438	2	6,437
	1	2,579	1	2,579	
	32	126,726	32	126,726	

(税関統計による)

第24表 輸出入実績 (単位:トン)

年別 昭和	輸 出				輸 入	
	セメント	木 材	合 板	その他	ラワン	その他
33	59,840	1,730	0	2,508	17,349	0
34	47,596	1,087	695	0	25,018	0
35	33,093	1,830	873	956	28,846	0

(税関統計による)

面から定期旅客船と漁船及び小型貨物船用の岸壁とし、鶴谷港と呼ばれる旧防備隊の南側防波堤の位置は中型貨物船の専用岸壁を設けることになっている。

葛港は、県南各地から定期旅客船や漁船の出入でにぎわっているが、昭和三十六年からは新たに宇和島との間に定期連絡船が就航している。

(二) 第一次・第三次産業

農 林 (山林面積が全面積の七七パーセントを占める)

水 産 佐伯市は第25表にみるように、山林面積は広くて、全面積の七七パーセントを占めていることが分かる。また、昭和三十五年(一九六〇)の佐伯市の人口は五万一千三百七〇人である。うち、農家人口は二万六千五百人であり、うち専業農家は六千八百人である。農業における主要作物は他の県南臨海二市と同じく、それらの収穫量も臼杵市と似てい

第25表 土地の区分 (昭和35年)
(単位: km², %)

区 分	面 積	比 率
総 面 積	196.92	
田	11.04	5.6
畑	6.06	3.1
山 林	151.63	77.0
宅 地	3.64	1.8
そ の 他	24.55	12.5

(『市勢要覧』1961年による)

第26表 主要農作物収穫量 (昭和35年)
(単位: kg)

品 名	収 穫 量	品 名	収 穫 量
水 稲	3,491,425	じゃがいも	340,454
陸 稲	8,564	さといも	278,586
裸 麦	1,680,352	な す	184,050
小 麦	1,323,893	ト マ ト	182,400
とうもろこし	17,400	き ゆ う り	121,940
え ん 麦	33,760	だ い こ ん	860,625
大 豆	401,420	に ん じ ん	283,200
あ づ き	40,680	キ ャ ベ ツ	244,500
え ん とう	10,080	白 菜	201,500
そ ら 豆	13,760	ね ぎ	243,600
さつまいも	3,564,000	た ま ね ぎ	473,400

(『市勢要覧』1961年による)

るが、ミカン類は他の二市より少ない。佐伯市の昭和三十五年における農産物粗生産額順位をみると、第一位が米で二億五九〇〇万円、第二位みかんで八七〇〇万円、第三位が裸麦五九〇〇万円、第四位養豚五四〇〇万円、第五位鶏卵三五〇〇万円である。

佐伯市の農業で特色のあるのは、いちご栽培で、昭和三十年代はすべて露地で栽培し、品種は「幸玉」であった。当時は六月十日から二十日頃までが収穫期で、ちょうどそのころは梅雨の時期で、収穫にも出荷にも不便な点が多かったという。(『佐伯市史』)。

また、農家の生産用具についてみると、昭和三十五年ごろは、日本の経済成長が始まるころで、農機具もかなり普及してきており、耕うん機一三二台・発動機六三三台・動力脱穀機六八三台・動力揚水機一五八台・農用トラック、オート

三輪二〇台など
となっている。

畜産業では、
飼養農家数が最も多いのは、役肉用牛が一二九七戸で、そのほか乳用牛一〇六戸・馬一〇二戸・山羊三一



キュウリのビニール、トンネル栽培
(『市勢要覧』1961年による)



進行中の耕地整理
(『市勢要覧』1961年による)



畜産品評会
(『市勢要覧』1961年による)

第27表 果樹収穫量 (昭和35年)
(単位: kg)

品名	収穫量
なし	25,125
もも	453,750
かき	289,920
ぶどう	172,500
びわ	57,600
うめ	8,000
みかん	1,272,000
夏みかん	200,000
茶	19,379

(『市勢要覧』1961年による)

戸・豚六五九戸・鶏一八一四戸・うさぎ一八戸となっており、家畜の種類も多い(『市勢要覧』一九六一年の統計資料より引用)。

九州山地の山脚にある臨海都市佐伯市は、森林資源にめぐまれてゐる。豊かな資源は近代工業とも直結しているが、古くから炭焼やしいたげ栽培に従事している人々も多い。林業農家数は一四五二戸ある。一五一・六三平方^{キロ}の山林のうち、八九・七平方^{キロ}が個人有林で、一五・五七平方^{キロ}が共有林、残る四六・三六平方^{キロ}が国有林である。

次に漁業については、佐伯湾は県南のリアス式海岸のうちでも、もつとも大きい湾で、湾頭の番匠川の河口近くに大入島が浮かび、湾内や島かげは波静かで付近に浅瀬が多い。

漁業従事者が多く、漁家数が約三〇〇戸、中でも大入島にもつとも多く、個人経営一七一戸がこの島にある。そのうち

第28表 林産物生産高 (昭和34年)

種 別	生産量
立 木	3,431m ³
素 材	1,326m ³
木 炭	16,360俵
薪	41,616m ³
木炭の原木	179m ³
薪の原木	522m ³
そ だ	28,850束
竹 材	1,134束
シイタケ	5,400kg

(『市勢要覧』1961年による)

第29表 漁獲高 (昭和35年)

(単位: kg)

種 別	漁獲量	種 別	漁獲量
い わ し 類	277,360	た ち う お	400
か つ を 類	8,740	え い 類	360
さ ば	500	その他の漁類	200,244
た い	15,566	い か 類	412
ひらめ、かれい類	1,889	た こ 類	14,456
あ じ 類	44,769	え び 類	32,170
さ わ ら 類	898	な ま こ 類	15,915
ぼ ら 類	4,570	貝 類	72,532
ず ず き 類	1,317	藻 類	14,398

(『市勢要覧』1961年による)

大入島の東側には小型機船による底曳網が五〇戸あり、西側に延縄が二七戸ある。これらは漁業種別からみて、県では特色あるものである。ほとんどが、沿岸漁業であるため、大型動力船は少ない。漁船数五七三隻のうち、無動力船が二六六隻で、動力船一〇ト未満が二八一隻、

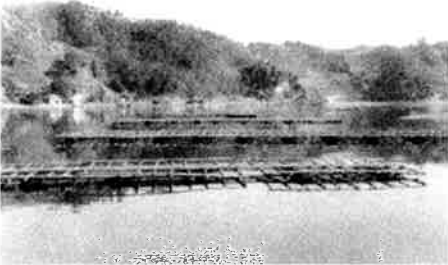
一〇ト以上の動力船は二六隻にすぎない。漁獲量のもっとも大きいものはいわし類の二七七トで、ついであじ類の四五ト・えび類の三三トとなつてゐる。そのほか、たい・たこ・なまこ等がそれぞれ一五ト位とれて非常に魚種に富んでいる。従つて水産加工では、いりこ製造が主要なもので、二五の経営者がいる。また、うにの生産者も一五あるが、これは全部大入島で、採集から販売まですべて婦人の仕事で、遠く四国の海岸まで採集に出かけている。さらに、接続してゐる上浦町や鶴見村も佐伯湾をかたちづかつてゐる漁村集落であり、そこで伯市の葛港にある魚市場に水揚げされる。近年周辺の海中における真珠養殖が盛んにな



佐伯魚市場
 (『市勢要覧』1961年による)



ウニの採取
 (『市勢要覧』1961年による)



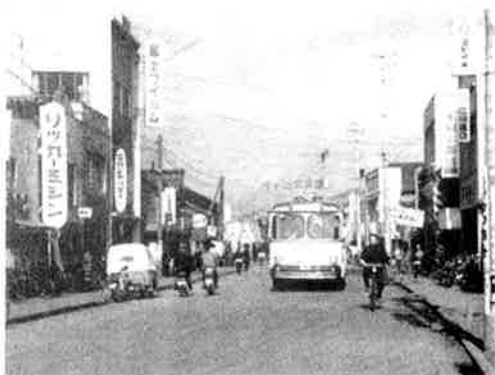
真珠貝の養殖
 (『市勢要覧』1961年による)

り、佐伯市の輸出のホープとして期待されてゐる。商業 〔南海部郡の町村を背景に商業が発達〕 佐伯市の商業は「佐伯市」を核に、南郡の町村を商圏に入れて発達したものである。したがつて、「佐伯地域」に商圏は限定されており、他地域への流出は少ない。いま、昭和三十三年七月一日現在で行なわれた「商業センサス」によつて県南の郡市別の卸売・小売・飲食店に分けて、その状況を見ると、第30表のとおりである。

り、佐伯市の輸出のホープとして期待されてゐる。商業 〔南海部郡の町村を背景に商業が発達〕 佐伯市の商業は「佐伯市」を核に、南郡の町村を商圏に入れて発達したものである。したがつて、「佐伯地域」に商圏は限定されており、他地域への流出は少ない。いま、昭和三十三年七月一日現在で行なわれた「商業センサス」によつて県南の郡市別の卸売・小売・飲食店に分けて、その状況を見ると、第30表のとおりである。



船頭町商店街
(昭和35年ごろ)



中央通り商店街
(昭和35年ごろ)

佐伯市の場合、県南地域では商店数、販売額ともに最も多いことが分かる。さらに、卸売一店当たりの小売店数では、臼杵市六・六、佐伯市七・九、津久見市一四・一、南海部郡四〇・二となり、臼杵市が最も卸売業が発達していることが分かる。また、津久見市は一四・一と卸売業が少くないのは、臼杵市の商業勢力下にあるためである。さらに、南海部郡は四〇・二と卸売業が発達していないのは、佐伯市の商業勢力下に組み入れられているから

である。佐伯市の商業の業種の推移をみると、戦前から継続している業種は、家具什器・理容店・食料品店で、昭和二十年代に開店が目立つのは、クリーニング・美

第30表 県南の郡市別商店数と販売額

郡市名	商店数			人口100人 当り商店数	販売額(百万円)		
	卸売業	小売業	飲食店		卸売業	小売業	飲食店
佐伯市	104	823	78	1.61	1,602	2,582	84
臼杵市	101	665	64	1.47	2,054	942	60
津久見市	36	507	54	1.36	604	1,371	87
南海部郡	17	684	18	1.09	67	656	6

(「商業センサス」昭和33年7月1日現在による)

容室・衣料品店・食料品店である。

さらに、昭和三十年代に入ると、自動車、自転車店がマイカー期突入を反映して目立ち始め、流通革新で各種商品小売業も出始めてくる。昭和四十年代には、飲食業の開業花盛り(中でも、うどんそば店・バー・喫茶店が多く、この年代に開業した)・ガソリンスタンドと、いずれも、世相を反映している。⁽⁶⁾

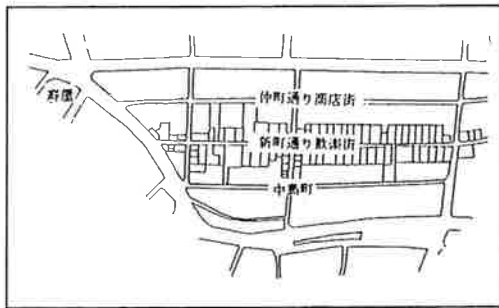
〔古市町に盛り場が形成され始めたのは昭和三十年代〕
佐伯市に盛り場が形成され始めるのは、昭和三十年代からである。きっかけは、昭和二十一年二平合板、二十八年興国人絹バルブ、三十一年臼杵鉄工がそれぞれ工場進出したことであり、これにより大量の雇用に恵まれ、これらの工場は市の復興の中心的存在となった。この高度成長期に盛り場として大きく成長したのが古市町である(第15図参照)。

昭和九年(一九三四)に埋め立てられてできた幹線道路のため、中島町は交通の便がよく、多くの施設が立地しており、地価が古市町より高かった。このようななかで古市町は、既に佐伯市の中心商店街として人通りの多かつた仲町と製材所などが集積する中島町にはさまれ、

相対的に地価の低い通りとして存在していた。

まず、古市町のうちに内町区の商人が酒場を始め、仲町の人通りを集めることで古市町が盛り場の様相を呈し始めた。それから城東町区の価格の低い土地を市内外の人が好景気に

乗じて買取していった。地主となった人々は、その土地に自分で店を出したり、人に貸すなどして利用し、住宅は別の場所で持つという形態を取るようになった。また、他の飲食店のあつた所は、地主が土地を売らなかつたり、仲町通りのような人の多く集まる場所から遠かつたり、何よりも古市町の方へ店を移転させる人も多かつたことにより、次第に古市町に飲食店が集中するようになったのである。⁽⁷⁾



第15図 古市町(現在の新町)の位置

第31表 交通・道路の整備

年代	月	交通・道路の整備のあゆみ
昭和三〇 (一九五五)	三	佐伯大橋完成
昭和三一 (一九五六)	一〇	城南橋竣工
昭和三一 (一九五六)	五	池船橋竣工
昭和三二 (一九五七)	三	駅前舗装工事竣工
	四	中川橋・棚野橋竣工
	五	間橋竣工
	八	長瀬橋完成
	九	西谷・杉谷間舗装工事成る
昭和三三 (一九五八)	四	国道大分佐伯線港地区道路舗装完成式
昭和三四 (一九五九)	八	長島橋竣工
	四	狩生駅竣工
	四	日豊線ジーゼル化へ。準急「ひかり号」開通式挙行
昭和三五 (一九六〇)	二	幹線道路舗装工事着工
	四	茶屋ヶ鼻橋竣工
	七	駅前から海運橋まで道路舗装終わる
昭和三六 (一九六一)	一〇	佐伯駅特急停車駅となる
昭和三七 (一九六二)	三	住吉橋竣工

昭和三八 (一九六三)	九	稲垣橋完工
昭和四〇 (一九六五)	三	櫛野橋完成
昭和四一 (一九六六)	一〇	幹線道路舗装完成
	一〇	広小路舗装完成

(佐伯市史・「市報さいき」より作成)

(三) 交通・道路の整備

道路・橋 (佐伯第一の佐伯大橋の完成) 佐伯市は昭和の整備 和二十年代の番匠川下流流域の改修工事によつて、市街地に出水の心配が消え、本格的に道路・橋の整備が可能になった。また、この時期は戦後十年が経過し、経済復興から経済成長も始まり、日本経済も高度成長にはいり、佐伯市内も道路改修や橋の新設・改良など交通環境の整備が次第に実施された。

いま、道路舗装や主な橋の新設・改良の歩みを示すと、第31表のとおりである。まず、昭和三十年代のはじめには、佐伯第一の大橋である佐伯大橋(幅員五・五〇m・長さ二六三・五m)が完成している。佐伯大橋は、

灘地区から鶴見町へ、木立地区から米水津村及び蒲江町の上入津へ、堅田地区青山から蒲江町へ通ずる、最も交通量の多い橋である。

第31表で明らかのように、佐伯大橋・長瀬橋(幅員四・五〇メートル・長さ二二〇・〇メートル)・檜野橋(幅員三・五〇メートル・長さ二八八メートル)の四大大橋のほか、市中を流れる中川(長島川)をはじめ、堅田川・木立川その他に、大小の橋が次々に架けられて、いずれも鉄筋コンクリートの永久橋として整備された。

〈木下知事を迎えて、茶屋ヶ鼻橋の竣工式〉 佐伯市内の橋の竣工の様子を二、三の橋を例に、当時の『佐伯市報』により紹介したい。

昭和三十三年十月に着工した茶屋ヶ鼻橋が竣工し、去る四月二十一日午前十一時から、木下県知事ほか地元関係者六十名が出席して、県市共催の竣工式が盛大に行われた。

橋は佐伯蒲江港線の県道堅田川の下流(旧橋よりやや下流)に架設され、ゲレバー式鉄筋造り、総工費八千七百二十拾三万六千円、延長百七拾七米、幅員五・五米、旧橋より二十米長く、三米高い。

竣工式は神事に続いて知事の手によって渡りぞめのテープが切られ、出席者全員の渡りぞめが行われた。

続いて地元蛇崎クラブで竣工祝賀式が行われた。この橋の竣工により、蒲江・鶴見・米水津三町村を結ぶ県道は整備され、今後増大する交通量、車両の大型化にそなえられ、観光・経済発展に役立つことになった(『佐伯市報』昭和三十五年五月一日号)。

〈二二〇メートルの稲垣橋みことに完工〉 昭和三十八年十月五日、佐伯大橋、長瀬橋に並ぶ稲垣橋が完工、渡初式が行われた。

佐伯市に、またく見事な永久橋が一つふえました。それは、去る十月五日に渡初式を行なった、延長二百三十米、幅員四・五米の稲垣橋である。

この橋は、昭和三十六年十月二十六日の集中豪雨で流失した沈橋のあとにかけ替えたものですが、過去においても殆んど洪水のあるたびに流失をくり返して来たために今度の永久橋の架橋については地元関係者の要望も非常に強く、関係各方面の協力を得

て、昨年八月二十日に災害関係工事として着工したものである。

以来一年有余、総工費約五千五百万円で完工したものである。

朝日夕日に映えるその近代的な直線美は、下流の長瀬橋、佐伯大橋と並び、全く壮観と云う外ありません。市では、去る五日午前十時から村上代議士、吉持道路課長補佐(知事代理)、田原建設省番匠川工事々務所長、地元県議など多数の来賓を迎え、市長はじめ市役所地元関係者約百名が出席して、盛大な開通式を行なった。



稲垣橋の渡初式(『市報さいぎ』
昭和38年10月15日号による)

橋上の祭壇での神事に続いて、市長がテープに鋏を入れ、選ばれた三代夫婦を先頭に来賓がこれに続き、新橋を往復して渡初の式を終った。

この渡初に選ばれた三代夫婦は、海崎の保田佐之吉さんの一家で、当の佐之吉さん(九〇歳)・シゲさん(八五歳)夫婦、茂吉さん(六四歳)・シオさん(五四歳)夫婦、富雄さん(三二歳)・美智子さん(二四歳)夫婦の三組で、先の住吉橋の開通式にも選ばれており、今回で二度目という、全くお目出たい一家である。



稲垣橋(『市報さいぎ』昭和38年10月15日号による)

尚、この後橋上で祝賀会を行ない、午前十一時三十分全部の行事を終わつた。

この橋は鉄筋コンクリートの永久橋で、基礎工事は大同コンクリートKK、下部工事は谷川建設KK、上部工事はPSコンクリートKKがそれぞれ施行したもので、総工費五千五百万円、昭和三十七年の八月着工したものである。

この橋の完成によつて地元の利便は勿論、県南部から佐伯大橋を経て国道十号線に通ずる利用価値にも極めて大きいものがある。そうして、さらに今後予想される鶴岡地区の都市計画事業施行の際の交通路としても大きく脚光を浴びることでしょう〔市報 さいき〕昭和三十八年十月十五日号〕。

幹線道路 〈失業対策事業で道路舗装〉 佐伯市は昭和の舗装 三十四年度から失業対策事業として幹線道路の舗装工事を始めた。昭和三十四年度分として、商工会議所前から明月前の延長八一メートル、幅員八メートル、工費九四万六千円でコンクリート舗装された。

この舗装計画は幹線道路、青野洋品店前から海運橋に至る延長二一八メートルを失業対策事業で、昭和三十四年か

ら昭和四十二年にわたる継続事業として、工費二千五四万三〇〇〇円で行なわれる。来年度から、年間二五〇メートルの予定で舗装工事が行なわれる。

工事はミキサ二台、トラック二台、クラッシュャー一台、ローラー一台、ベルトコンベア一台等の機械力を動員して、着々と進められている〔市報さいき〕昭和三十四年十二月十五日号〕。

佐伯市の幹線道路の舗装は計画よりも二年早く、昭和四十年（一九六五）十月に完成している。

西上浦 〈日豊線に狩生駅ができる〉 日豊本線浅海井・の新駅 海崎間に新たに狩生駅が昭和三十四年四月に新設される。

新駅は昭和三十二年西上浦建設委員会が建設され、最も難関とされていた建設資金の調達も順調に進み、昭和三十三年十月十日着工の運びとなった。

狩生駅は西上浦支所の前付近で総工費概算五七四万三〇〇〇円で、線路の南側に二〇〇メートルのプラットホームを作り、駅舎は六〇平方メートル、其他宿舍、便所等がある。新駅は旅客駅（旅客手荷物）として通勤・通学者の便はもとより、地区の産物・ミカン・イリコの積出しにも大いに

役立つと地元は喜んでいゝ『市報さいき』昭和三十四年三月一日号。

【注】

(続く)

(64) 兼子俊一『大分県の地理』(光文館 昭和三十七年)

(65) (64)と同じ

(66) (64)と同じ

(67) (64)と同じ

(68) (64)と同じ

(69) 『佐伯地域商業近代化計画』(佐伯商工会議所商業近代化佐伯地域部会 昭和五十年)

(70) 「中小都市における盛り場の形成とその意義―佐伯市新町通りを事例として―」(『大分地理第7号』大分大学教育学部地理学教室 平成五年)

川名のルーツ

◆番匠川

番匠とは中世の大工のこと。この川が大工の持つ折尺

のように曲りくねっているので名が出たという説があるが、本当だろうか。

中世・佐伯氏の榎牟礼(とがむれ)城のふもと、江戸時代の佐伯城下への関門に当たる川岸に番匠の集落がある。大工集団の居住地か、それとも番所の位置か。川名がこれから出たのかもしれない。昔はこの付近から河口までを番匠川とっていた。いま上・中流部を占める本匠(ほんじょう)村は合併のさい番匠川の本(もと)であるの意で名付けられた。

◆床木川

床木は旧村名で、古くは牀木とも書いた。そうした材木を出したところかもしれない。

◆井崎川

番匠川との合流点付近に井崎の地名。井は井路、水路のこと、井路の先と考えてよいだろうか。釈魔神の尺間山(しゃくまさん)を発するので古くは釈魔川は呼ばれた。(『日本全河川ルーツ大辞典』)